漢代の刑罰と宮刑について - 前稿「漢代の宮刑について」を改題

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>内田 智雄</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>同志社法学</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>ー</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td>ー</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>ー</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>ー</td>
</tr>
<tr>
<td>権利</td>
<td>同志社法学部</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000009806">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000009806</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
abd
abd
abd
abd
abd
光武二十九年，夏四月乙丑
(按) 賜三公、東郡國、中都官死罪繫囚，減罪一等，勿笞，詔度遼軍營，屯朔方、五原之邊縣，妻子自隨，便占著邊
(注) 明帝永平八年，冬十月丙子
(按) 其大逆無道殊死者，一切繫下獄室。
(按) 諸侯將軍，郡國相、令守，及郡國郡相、令守，有罪皆繫司寇作之。
亡命者，令賜罪各有差。
凡徙者，賜弓弩衣粮。
注(1)占籍謂附名籍。
(1)明帝永平六年(甲)九月丁卯
(1)詔郡國中都官死罪鬹囚、減死罪等、勿笞、詔軍營、屯騎方、敦煌、妻子自隨、占籍所在、父母同產欲相從者，恣聽之。
(4)天下鬹囚、減死等、勿笞、詔軍營、屯騎方、敦煌、妻子自隨、占籍所在、父母同產欲相從者，恣聽之。
(5)犯殊死，一切老下蠧室，其女子宮。
(6)章帝建初七年(乙)九月辛卯
(7)詔 Brussels 之《白學》、皆滅本罪各等、輸司寇作。
(8)繫囚鬹罪、皆滅本罪各等、輸司寇作。
(9)盡人有罪未發覺，詔書到自告者，半入贖。
注(1)軍興而致困乏，當死刑也。
前書曰、鬼薪・白粲已上、皆三歳刑也。男子鬼薪、女子白粲、取薪以給宗廟、女子奴婢、使撫米白粲然。

注(2) 章帝元和元年(辛)八月癸酉
(1) 補曰、(中略) 其改終初九年為元和元年、郡・國・中都官紋囚、減死一等、詔金城戍。
(2) 令郡・國・中都官紋囚、減死一等、詔金城戍。
(3) 九月壬子
(4) 正月章帝元和元年(壬)夏四月丙子
(5) 同じ年の秋七月の詔。
(6) 死罪囚、犯法者、丙子赦前、而後捕獲者、皆減死、勿笞、詔金城戍。
(7) 犯殊死者、一切募下蠧室、其女子宮。
(8) 繡囚鬼薪・白粲已上、減死一等、輸司寇作。
(9) 死罪繡二十四、右趾至髡鉢城旦春七、宛城旦司寇三、三。
(10) 吏民犯罪未發覺、詔書到自告者、半入蠧。
上記のように光武帝から霊帝にいたる詔には、その簡繁や内容において若干の差異が認められるとしても、かかる同種の詔が殆ど各帝ごとに、殊に明帝や章帝においては、一代数次にわたって出されているが、かかる発はそもそも如何なる事由によるかをまず考えてみたい。いま上掲の詔書を通覧してみると、帝紀にはそのことを明記していないが、結果的には改元の年に出されているものが多いことが知られる。すなわち上掲詔書の(四例)がそこである。また地震によるものとして、前掲の建武二十年(四例)の詔に、

注(四例) 強、解微、(中略) 舊法、在役者、不得衣織、今放免之。

(四例) 九月戊辰の詔に、

死罪禁囚、在役者、減死罪一等、徒皆施解両、衣織、臨郡中居人、脅死者、槁人も三千。

(四例) 九月己卯の詔の前文には「地震、庚寅、地また震う」とあって、この詔が地震の再発によるものであることを物語っている。また旱害によるものとしては、和帝永元六年(四例)の詔に、

(四例) 秋七月、詔中都官徒、各除半刑、詔其未竟、五月以下皆免遣。

(四例) 同志社法学二十八号

同志社法学二十八号

同志社法学二十八号

同志社法学二十八号
郭鸞は父の弘が伝える小杜律（杜周の子の延年の伝える法律）を伝授し、明帝の永平（83年）年に廷尉正となった。郭鸞は、法に坐して免ぜられ、のちに廷尉に任ぜられた。故の（の）（の）（の）（の）には、「（今郡国中都官無犯・死罪一等・詰金城」（郭鸞伝））の（の）（の）（の）（の）には、「（今郡国中都官無犯・死罪一等・詰金城）（郭鸞伝））とあって、亡命していまだ発覚していないものについては、その減罪のことが言わせていないところから、郭鸞は次のような封事を上っている。

聖恩所以減死罪使戍邊者、重人命也。今死罪亡命無慮萬人，又自赦以来、捕得甚鮮。而詔令不急，皆當重論、伏惟天恩莫不蕪有，死罪已下並蒙更生，而亡命捕得、獨不沾澤，臣以為赦前死罪、而繫在赦後者，可皆勿詰詰金城，以全人命，有益於邊。郭鸞伝）

と。郭鸞この封事によって、章帝は「これを善し」とし、即ち詔を下し（郭鸞伝）たのが、の（の）（の）（の）の詔である。すなわち郭鸞の封事の大要は次のとおりである。章和元年四月丙子の詔書によって、一般的死罪以下が「詰金城」（郭鸞伝）に詰められ、死刑をもって論ずるよりほかにはない。しかしながら、詔書によって免ぜられたものには及ばないというもののであってはならないと思う。それで、丙子の詔書の出る前に亡命の罪で死刑を
漢代の刑罰と官刑について（二）

同案法学<br>
二八巻

（四）（八六）<br>
中華書局 1960年<br>

金城の戊辰に行かされるようにされた、というのである。そして郭躬の封事に於いて出されたのが、白（白）の詔書発布の時点における「繋因」として、「隠」として、「隠」として、他の詔書にかかる日は、隠書発布にかかる日をもって、一方で、前記の詔書発布後には発覚捕縛された犯罪者については適用されるという。従って、一方において、用典に対する言説が解明できると思われる。かくて庶政の一新を意味し標榜する改元の際や、地元・災怪・日食など自然現象の変異が、ただちに政治に対する説を著しく考えられた中国においては、上記のような機会に、一定の条件のもとにある犯罪者に対して、繋因は、繋因に及ぶという若易に、すなわち官給物賃の補充や、職員に政策的な効果をもあわせもつわけである。その極端な場合が、回應の詔書（図）であって、いずれも天下の未だ因をことごとく繋をもって賛辞し、というものであって、これはもはや、上記のような意味で、繋因は、繋因に及ぶという若易に、すなわち官給物賃の補充や、職員に政策的な効果をもあわせもつわけである。その極端な場合が、回應の詔書（図）であって、いずれも天下の未だ因をことごとく繋をもって賛辞し、というものであって、これはもはや、上記のような意味で、繋因は、
漢代の刑罰と宮刑について

同志社法学 三八巻六号
十六（八七〇）

子の直轄地たる「郡」、と、諸侯王の封地たる「国」、と、京師の諸官府たる「中都官」とを総称するものであることが

詔郡国刑囚、減死一等、勿答。唯謀反大逆、不用此書。（呉、明帝永和六年詔）

が見られる。これについて沈家本は、「惟う郡・国のみを赦し、中都官のみひとり赦せず、おそらくはこの法なし。

詔郡国死囚減死、與妻子諸五原、朔方占著。（内、明帝永和五年詔）

官が京師の諸官府たるることによって、特に郡・国のそれと区別する場合にのみあるものに、

疑うるくはこの紀に脱文あらん。（沈家本書案。）考、考较、考例、といっているが、これとは必ずしも左様でない、中都

官が京師の諸官府たることによって、特に郡・国のそれと区別する場合にのみあるものに、

秋七月、詔中都官徒、各除半刑、譲其末竟、五月已下皆免遣。

とあり、また質帝の永嘉元年（〇五）五月甲申詔にも、

その令中都官減囚、罪非殊死、考未竟者、一切除出、以須立秋。（質帝紀）

とあるのがそれでも、これは中都郡・国のそれと異なる行刑地域であるということによって、時として郡や国

は異なる処扱いをする場合があるのであって、沈家本の説のことく、帝紀の脱文のみはいうを得ないと思われる。

また「天下」あるいは「郡・国・中都官」の「厳囚」という語をまったく用いないで、たとえば光武帝建武二十八年

の詔（）には「詔死刑罪囚、下略」とあり、同三十二年の詔（）には「詔令天下懲囚、下略」とあるが、その中間の

建武二十九年の詔（）には「詔令天下懲囚、下略」とあって、これによって詔（）も（）も、ともに「天下」の語を略し
たものであることが知られる。また、同様な省略が見られる順帝の永建元年（89）の詔について、「詔減死罪以下徒裁」と見られるが、これは安帝の延光三年（14）の詔の詔意を解釈するよりもほかならない。

なお上記のごとく、『天下』における郡国・中都官の『繋囚』を加えたものが後漢初期の武帝の詰に現れている。いま詔ともに、その中に刑名を考える資として、必要な後漢書注をあわせて記すれば次のようになる。

すなわち、建武五年（29）五月丙午、詔曰、久旱傷麥、秋種未下、朕甚憂之、將恩吏民、務多穀結、元元愁惧、感動天氣乎、其令中都官、三輔郡・國出繋囚、罪非殊死、一切勿案、見徒免為庶人、務進柔良、各正厥事焉。（光武記）

なお、改命（29）春正月丙申、詔中都官・三輔郡・國出繋囚、非犯殊死、皆一切勿案、見徒免為庶人、耐罪亡命、吏以文除。

注（下）耐、輕刑之名、前書音義曰、一歲刑為罰作、一歲刑已上為耐、耐者乃代反、亡命謂耐罪而背名逃者、今吏為文簿。記其姓名而除其罪、恐逃不歸、因失名籍。

さて、前詔は久しく旱魃がつづいて秋の収穫が気づかわれる状態にあるが、それは冤獄が多くて民が愁惧、そのため天がかられる旱害を下すにいたったのではなくかとして、中都官・三輔郡・国の繋囚にして、殊死の罪を犯した者以外は、すべてその罪を問わないこととし、また現に徒役にある者は、免じて庶民とせよというのもである。
漢代の刑罰と宮刑について（一）

三輔謂京兆・左馮翊・右扶風、共在長安中、分領諸縣。（武帝紀）更始元年九月庚戌の條

そして後の詔には、詔の出された事由を記していないが、この二つの詔に見える「三輔」について後漢書注には、

三輔謂京兆・左馮翊・右扶風、共在長安中、分領諸縣。（武帝紀）更始元年九月庚戌の條

あって、これは三輔の豪傑共に王莽を誅し、その首を伝えて宛（今河南省南陽県の地）に詰るという記事の注に
見えるもので、当時の都長安の周辺の地をいうが、この「三輔」の語がこの種の詔においては、建武初期のそれには
見えている。その後の詔に見えなくなっているのは、建武元年十月に、都を長安から洛陽に遷したことによるもので
ある。

次に死罪を減じて徙選する場合、詔にしばしば見える「勿答」の語について触れておきたい。

 Romaniaに列挙した詔においては、①・②・③・④・⑤にいずれも「勿答」とあるが、その他の詔にはこれを
見ない。他方、詔そのものの内容上、答刑について記する必要がないと考えられるものに⑥・⑦、⑧および⑨以下の詔
がある。これらはいずれも減罪の詔であって、始めからその有無を記載する必要がないということである。しか
し減死徙選の詔においては、この語の有無は一応問題とせざるを得ない。いま一例をさきにも記した⑧の章帝の章和
元年の詔に求めてみると、

甲）夏四月丙午。令郡国・中都官禁囚、減死一等。詔金城成。

乙）秋七月、死罪囚、犯法在丙子赦前、而後捕獲者、皆減死。勿答。詔金城成。

とあり、乙）は前記のことく郭躬の上書によって、甲）の適用範囲をやや拡大したものであるが、刑そのものの
内容を変更したものではない。従って乙）に見られる「勿答」の語は、甲）に節略されていったのを書き加えたもの
と考えられる。さきの光武帝以来の詔を通覧すると、前詔または前帝や先帝の詔文をそのまま沿襲するものの多い

漢代の刑罰と宮刑について（三）

女子を宮する場合などに限られているといってよいであろう。その意味において沈家本の説は、結論としては賛同し得る。も、その推論の根拠とするところには賛同しだいといわざるを得ない。

上掲の説には、徙遷の土地を明記するものに、謁度遼將軍營、屯河方・五原之邊縣、與妻子謁五原・朔方占著、謁軍營。

などあり、地名を明記するものに、詔簿・扶風屯、詔敦煌、詔金城、詔北地・上郡・安定、詔敦煌、隴西及度遼營。

その不能入贄者、遺詔臨羌県、居作二年二等、その土地を明記しないものには、
漢代の刑罰と宮刑について（下）

同志社法学 新八巻六号

（上略）

「妻子自ら随行」とか、「父母同産あい従わんことを欲する」とかといった表現に繋がることができ、それは一面において、従遷地に定住せしめようとの植民的な意図を織るものと思われる。

（上略）

「妻子自随、父母同産欲求従者、罪従之、女子嫁為人妻者、勿與俱。」

とあって、妻子や父母兄弟はこれを認めても、すでに嫁して人妻たる娘に対してはこれを禁じている。

これら避難の土地への従遷に際して、どのような護送の方法がとられたかは詳らかでないが、上記のような赦書の発布にともない、一斉に「天下」の多数の囚人が送られる場合については、おそらくこれに相当数の役人を伴う、集団をなして護送されたものと思われる。その護送の過程において、時に生じたであろう脱落者や逃亡者に対しては、「みな軍興をもって論ず」としており、一種の軍律をもって厳重な処罰をするのは、詔書に応、屯、辺戍、軍の名を認めるものであって、死刑囚の減等の刑としての従遷刑が、本来の意味を逸脱して、植民を目的としているのがそれである。

その訳の「父母同産の在者らんと欲する者は、恣にこれを許す」という詔であって、これは明らかに受刑者の代人を認めるものであって、死刑囚の減等の刑としての従遷刑が、本来の意味を逸脱して、植民ないし従遷地の守備兵たる命令、張掖、酒泉、敦煌及張掖屬國縣、右隷已下任兵者、皆一切勿治其罪・詔軍營。
とあって、上記のような中団の辺境地域では、その刑が右鉾以下の罪で兵役に堪え得る者は、一切そとの罪を問わず、兵員として軍務に徴収するというのである。ここにいう「右鉾已下」の刑名については後に改めて考察の機会にきて免除されるということはいうまでもない。まず後に改めて詳記する蔡窓の場合であるが、窓は霊帝の光和二年（139）に家族とともに五原に徴され、翌三年の大赦をもって宥されている。窓の伝はこれのようになる。従選刑が原則として、大赦や特赦によって免除されることにはいうまでもない。また霊帝紀には中平元年（138）三月壬子に大赦天下の人、遠征者、唯張角不赦として、大赦天下の人、遠征者、唯張角不赦という。「中平元年、黃巾賊起、中常侍呂顕言於帝曰、黨鬩久積、人情多怨、若久不赦宥、輕與張角合謀、為變難大、逆之無教、帝懼其言、乃大赦黨人、誅従之家」を采にしたのがこの例で、これは党人に対する大赦であって、一種の特赦である。そして霊帝伝はこの大赦の詔の発せられた経緯を次のように記している。

注1 詩大雅蕪序曰、厲王無道、天下蕪蕪無綱紀文章。鄭玄注云、蕪蕪、法度廢弊之貌也。
六月辛卯、废皇后隠氏、后父特進網自殺。

とみあるが、これには次のような背後事情が存している。

和帝の隠皇后は、貴人の隠氏の徳望が日に高くなるにつれて、帝の愛寛がよいほど衰えるようになったので、ついに貴人に嫉み、祝詔をなしてこれを害しようとした。永元十四年夏、この事が発覚して廃され、隠皇后自身は憂死し、父の網は自殺し、後の弟三人と外祖母とは日南の比景県に従され、宗親内外の毎弟はみな免官して田里に還らしめられた。

かくて隠貴人は立てられて皇后となり、元興元年（83）に和帝が崩すると、十三歳の安帝を擁して朝政をとり、永初四年（93）にいたり、隠皇后の巫蠱に坐して徙送されたものを郷里に還らしめた。後漢書はこれを次のように記している。

太后謫隠氏之罪廢、赦其徙者歸郷、赙還資財五百餘萬。 [和熹皇后紀]

と。このように特赦は、特定の人や場合に限られる赦であって、その数もおのおずから限定されているが、大赦は天下一般的な赦であるのみならず、その回数もかなり頻繁に行なわれている。いま沈家本によると次のようになる。

明帝は在位二十八年に大赦三回、章帝は在位十三年に三、和帝は在位十九年に五、隠帝は在位三年に一、安帝は在位十四年に十四、靈帝は在位二十二年に二十、少帝は在位六年に一、順帝は在位四十年に十三と。そして沈家本によると九、『大武、盛時には赦少くして乱時には赦多く』と結んでいるが、結果的にそこには互の交互関係が成り立つことを示すことができる。
それである。すなわち一方において、大赦によって徙刑の刑が有効化されて、区の守備兵の減員が生ずるのに対し、他方、減死徒刑の詔の頻発によって、邊地防備の兵員は絶えず補充されるため、兵員の交替や志気更新の役割を果たすこともできる。なお序であるが、徙刑の刑刑の現地における生活の一端を計れば、蔡讁伝注に引く「書別伝」とよぶ、「臣既に徙所に到り、塞に乗り烽を守り、職として侯望に在り、憂慮焦灼して云云」とある。蔡讁の侯望に従事していたことが知られる。

以上、さきに記載した後漢歴代の天子の詔の(や)の(の)も、すなわち死刑を減じて徙刑するというものをつづき、その用語若干の解釈を試みたので、次に徙刑の記述ないし事例を後漢書の帝紀、列伝に従ってみることとする。しかもその挙げるところの事例は僅少であるのならば、順帝(9年)以後の後漢後半期に属するものの中に、その一例を観て得るものが少からぬ。前漢の事例数例を示すことによって説じ、後漢書はこれを次のように記している。

(1) 安帝が延光四年(122)に崩すると、章帝の孫の北郷侯絶(絶)が即位、絶の高弟は絶に坐したが、死に一等を減ぜられ、また絶絶は後に東郷侯、三百戸に封ぜられた。
漢代の刑罰と宮刑について

（100）に政を桓帝に帰して崩じ、梁翼が延熹三年（160）に崩すると、
梁翼はただに反乱を起こした。桓帝は
自ら督戦して梁翼の邸宅を洗んで大将軍の印綬をとりかえし、梁翼は妻子と
それ親数人にみな誅に伏した。このとき胡広も韓縁も孫朗も共にこの事件に関連してその罪を問われた。いまこれら三
人の罪とその処分を桓帝紀に引く「東観記」によると、

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣伝）

大将軍梁翼誅、演坐阿釈抵罪、以減死論、
遺朝本郡、復拜司徒校尉。（韓縁傳）

大将軍梁翼誅、（胡）

（延熹）二年、梁翼誅、

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

明紀（延熹）九年、梁翼誅、

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

すなわち韓縁伝および梁翼伝によると、
胡広はの罪は単なる左顧右難といったものではなく、
梁翼の阿釈を現させなかったということになる。またその処分も、
帝紀・列伝と

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）

（延熹）九年、復拜司徒。（胡廣傳）
漢代の刑罰と宮刑について

於是下処罰於洛陽獄，劾以仇怨奉公、議害大臣、大不敬，市、事奏、中常侍呉強、眾議無罪、請之，帝亦更思其章，有詔減死一等，與家屬髡鉤徙朔方，得以赦令除。稲倉

この祭釈の伝には、若干の解説を付しておく必要がある。「大不敬」の「不敬」とは、漢の張騭の泰始律（26）の注に、大不敬の刑を施されるという、さきの諸説の「勿答」にあたって、そのことを説明するためのものである。大不敬の刑を施されるという、さきの諸説の「勿答」について、その解説は、大不敬の罪が見出されない、ということがある。

しかし元和元年（168）七月、霊帝の除災に対して上った釈倉章は、輔弼の大臣を議害するものともとされる内容のことを説明するため、大不敬の刑を施されるという、さきの諸説の「勿答」について、その解説は、大不敬の罪が見出されない、ということがある。

次に、家集とともに髡鉤して朝方に従う」とあるが、家族とともに従事することを認めめた詔は、さきに列記した詔の（四）、（七）、（九）等にすでに見えるところであって、そのこと自体は異とするに足りないが、問題は本人に髡鉤が施されたということである。髡鉤刑が著しく身体の自由を制限するものであるということである。

しかし髡鉤の刑が独り霊倉にのみ科せられたものでないことは、霊倉（27）の崩後、北斎侯権が立てられて天子と

泌・鍔滅死、髡鉤（安思闇皇后紀）
漢代の刑罰と罰刑について（三）

同志社法学　二八巻　百八号

すなわち、邕の徒遷が赦令の適用外とされていることは、徒遷刑が一般に赦令によって解除されることを物語っており、従って徒遷刑に限っていっても、赦令の発せられる時期如何によって、徒遷刑の期間に短縮の差が当然なって赦免されており、これを彼の伝は次のとく記している。

して彼伝の作者にあって廻植・韓経らと後漢書を撰補させうが、たまたま事に遭いて流離して成すを得るに及ぼす。因

里て上書して自ら陳べ、その著わずところの十意を奏し、首目を分別して竇の左に連置す。帝はその才の高きを嘉賞し、明年の大赦に会い、乃ち竇を宥して本郡に還す。

① 東觀は洛陽宮の南宮にあり、蔵書・校書・伝授・著作・修史・撰集などを行なう建物で、東觀記の書名はこれにをつける。後漢書注は『なお前（漢）書の千字のことし』とされている。

② 年の三月から十月までのことというということになる。他方、彼の伝には「竇」、従されてより帰るに及ぶまでおおよそ九月とあり、前記のことく大赦が光和三年の正月であるから、これから逆算すると、その徒遷は前年の五月頃と推定される。
が、それに対する罰の上書の中に「臣、年四十八年」とあり、これが光和三年ということになる。なお、その後について記述する伝の記述には、後漢の刑罰を考える上で若干の史料を含んでおり、後に改めて考察の資に供したいと考えている。

以上、蔡邕の伝に見られるように、かつては説教の適用を受け得ないとされていた彼の従乱刑が、僅々九ヶ月後の大赦に際して解除されている事実は、天子という最高権力者の威信や、愛憎によって、刑罰が容易に左右される一面を物語るものというべきであろう。

(6) 順帝の平元年(149)に黄巾の賊がおこり、廬植は北中郎将として天下の諸軍を発してこれを征し、連戦して方余を斬獲した。賊の張角らは敗走して広宗(今河北省広宗の地)に集まったので、植は圍みを築き阮をううが雲梯を作り、今やこれを抜かんとする態勢にあった。そのとき順帝は小黄門の左豊を遣わして戦況を視察させた。それで、ある者が植に勧めて、路を豊に贈って戦況を有利に報告させよと/or するに、順帝の旨は破壊し易い形勢にあるのに、植は豊を守って軍を息ませ、自然に敵の降るを得たといった状況にあるというのもであった。順帝はこの報に怒り、植を罪人通送用の檻車に乗せて召還し、死罪一等を減じたとあるが、

(7) 史部は陳留考城の出身で、桓・靈時代の一人。始め州郡に仕え、のち累進して尚書となり、出でて平原の相、さらに河東の太守となつた。時に孝廉の士を挙げべき詔を受けたが、笏はあらかじめ推薦の詔を多からんことを慮れて、一切の依頼を受けて居なかった。しかるに中常侍張賜の使者の策にかかって賜の依頼の書を読まされ、怒った笏は

同志社法学二巻第六号
三三（八八）
漢代の刑罰と宮刑について
漢代の刑罰と宮刑について（二）

同志外交学　八卷　八

（三）

（八）

観は激怒して詫って飛書（匿名の手紙）を作って弼を司隸に下し、誹謗の罪をもって廷尉の詔狱で乗市の刑と定められ
た。しかし弼の友知らが観に暗路を詰め、死罪一等を減じて左校に輪作することとなった。後漢書はこれを「得減死
罪一等、論輪左校」と記している。かくして弼は左校での刑期を終えて郷里に帰り、病と称して門を閉ざして出なかっ
たが、しばしば公卿の推挙を受け、また議郷の何事か、弼は「幹国の器なり、宜しく台相に登すべし」と詫れたので、
従されて議郷を拝し、雲帝の光和（183－188）年間に彭城の相となって没した。（史証伝）

以上、死罪二等を減じた七例を倣目の後漢書列伝を中心に紹介してきた。しかしいずれも順帝から桓・雲時代に
属するものであって、後漢初期の事例を提示しない憾みがあるが、いま上記七例について要約すると次のようなこ
とになる。

（1）高梵は賊罪によって死一等を減じられたが、その賊罪が如何を処刑するか、その賊罪が如何に基づくか、その賊
罪が如何なる刑罚を科されたか……

（2）趙騰は朝政誹謗の罪によって、徒党を繰り返し重法に服することとなっ

（3）桓帝の延熹二年に大将軍の梁冀が反乱を起こしたとき、三公の職にあった胡広と韓縉と孫朗とは、ともに宮衛を

発してこれを討つが、戦れに敗れ、梁冀に「阿黨」した罪によって、死を減じて本郡に

帰らしめたとあり、黄瓊伝には、「太尉の胡広、司徒の韓縉、司空の孫朗は、みな梁冀に「阿附」した罪によって「免

廃」されたとあり、胡広伝には「みな死一等を減じ、爵士を奪い、免じて庶人となる」とあって、三伝の記述に簡

繁の差があるが、その罪名と地位から、胡広伝の記述をもって精確なものが見るべきであろうと思われる。
恒帝のとき南方の蛮の侵寇に際して、南郡太守の李蒼は、諫止する胡糾を斬って逃走した罪によって棄市となり、

同じく逃走した荊州刺史の劉度と謁者馬騧とは、それぞれ死一等を減ぜられた。

(4) 賊のとき南方の蛮の侵寇に際して、南郡太守の李蒼は、諫止する胡糾を斬って逃走した罪によって棄市となり、

北中郎将の盧植は黃巾の賊を敗走させ、賊将の張角と相対峙し、今やこれを隠せんとする状勢にあったが、小

(5) 蔡邕は大不敬の罪をもって告労されたが、雲帝の詔によって死罪一等を減じ、発銃して家族とともに朔方に徙さ

(6) 河東太守の史鰲は、孝廉の士の推挙に一切の請託を拒否していたが、中常侍侯寛が使者の策を弄して請託したの

(7) で、これが即日拷殺させた。侯寛は怒って弔詟の罪をさせたため、廷尉の詔憑において棄市の刑とされた。しか

し友人たちの袁の対賤によって、死罪一等を減じ、爵位封邑を取りあげて庶人としてのもののが(3)であり、左校に輸作することとな

(8) で、死罪一等を減じて左校に輸作することとなったが、

(9) これで漢後半期の僅少な事例をもって、早急な措置は厳に慎むべきであるが、さきの(4)の明帝永平八年の詔(1)以

(10) これ後漢後半期の僅少な事例をもって、早急な措置は厳に慎むべきであるが、さきの(4)の明帝永平八年の詔(1)以

(11) 下、各帝の詔における減死、一等の刑が、一例もなくことをとく従従刑であるのとは、まさに対照をなすものであ

(12) るということができる。もっとも論説のようないくが、(13)の蔡邕の場合のみということになる。もちろん

(14) これは後漢後半期の僅少な事例をもって、早急な措置は厳に慎むべきであるが、さきの(4)の明帝永平八年の詔(1)以

(15) 下、各帝の詔における減死、一等の刑が、一例もなくすることと従従刑であるのとは、まさに対照をなすものであ
漢代の刑罰と宮刑について

同志社法学三八巻六号
三六（八九○）

はないと云うもので、その意味において、死罪一等を減じて左校に輸作させたとする（7）、
減じた刑の何たるかを記さないものやないのをいうにするとある
のであって、そのこと成就の後漢時代の従遅刑は、死刑に次ぐもの、减刑、左校に輸作させたとするに
上記のことごとく後漢書には、死罪一等を減じた事例が彼少ながら見出されるが、晩書刑法志によると、前漢末に近い
死刑を軽くしたのが三十四事例、哀帝の建平五年（83年）に、
そら見れば、元帝の初元五年（58年）に、死刑を軽くしたのが三十四事例、
これは梁統（生卒不詳）が光武帝に呈した上疏の中に見えるもので、
そのうちの四十二事例は、人を手づから殺したものにつき、
明文化して恒常的なおきてとした。（後略）（原文は詳注中国歴代刑志、七三頁参照）

元帝の初元五年、輕則死刑三十四事、
建平五年、軽則死刑を減じたのが八十一事例、
死罪の減軽を行なっていたこと、
とあって、その注に引く『東漢紀』の記述もこれとまったく同文である。
これによると元帝のとき、すでに相当多く
死罪の減軽を行なっていたこと、
哀帝のときには減死一等をもって常法とするにいたったことが知られる。
晩志はこれを「著して常法なり」と記している。
漢代の刑罰と宮刑について（二）

日食侍郎であった宣の子の易は、申威のこのことに補われ、父の宣を絞るするであろうことを恐れて、楊明に密告したので、そのうえ申威がその職にハケ所の剖を負わせ、それで衰はこの事件を有司に下し、その科すべき罪刑を上奏させて、御史中丞の奏して、この所をはかれたが、骨肉の間で疑心をいさぎ、申威が修の言をきいて宣をあしあげ、その根拠を論議し、申威のいうところは人詛実の行跡であって、衆人の昭知するところであり、廷臣たるものよく一般の民一人もしばしば吟懐されて、言の葉を霊し、論議の種を根絶し、楊明に宮門のきわめて近くに待ち伏せさせ、大道人衆の中で天子の近臣を殺傷することを恐れ、申威を奏することを恐れて、申威が修の言をきいて宣をあしらって、その科すべき罪刑を上奏させているが、御史中丞と廷尉の意見が甚だしく異なっているのみならず、その論刑の根拠するところにも興味があり、いわば当時の求刑の態度を窺う足しに足る史料とも考えられるので、序でもってその概要を記しておろ。
(11) 重要の留意点

重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重要
重
漢代の刑罰と宮刑について

また「伝」（出典不明）には、「人を遇するに義をもってせずに、殺された者と罪は釈」

との二つの場合に、律では「不直」（不直をを）という。人を遇するに義をもってせざるを不直とし、殺された者と罪は同」とある。

申威は修と非常に倹かみよく、修のためにしばしば宣を悪しごまにするが、その皮膚を剥ぎ、歯を抜いて黒くしたとしても刑罰は変わらない。そこで、申威は天子の側近を傷つけた下等人であって、その罪が大不敬にあたるが、もはや公罪にせよ、死刑に陥るのではないか。陥下の仁慈な詔意に違わぬのであり、また法の精神でもないと思われる。従って御史中丞の意見のように極刑に処すべきではない。立派な君主は、自己一身の怒りをもって刑を重くするといったことはささなものである。楊明は賄賂を受けて一方的に人を傷害したわけで、その罪は不直にあたり、況とその意味は皆その爵位
哀帝は公卿や議臣にこの両者の意見の是非を問うたところ、丞相の孔光と大司空の師丹とは、御史中丞の意見を＃ってはなんとし、将軍以下博士・議郎たちは、延尉の説をもって是ととした。結局、哀帝は丞の意見を廃し、宣は免官して庶人となし、故郡に帰らせたとある。漢書はこれを＃況絶滅罪一等、徙敦煌、宣坐免為庶人、歸故郡、卒於家（薛宣傅）

頌宣がない者、司隷、校尉であった当時、丞相の孔光はその官属をして禁じられて館に閉じられていた。このため宣は、天子の使者を指して門へ入れさせなかった。これで事件は御史に下され、中丞の侍御史が司隷の官を出向して宣の属官を逮捕しようとしたが、宣は門を閉ざして侍御史を内に入れさせなかった。これで事件は御史に下され、中丞の侍御史が司隷の官を出向して宣の属官を逮捕しようとしたが、宣は門を閉ざして侍御史を内に入れさせなかった。このため宣は、天子の使者を指して門へ入れさせなかった。これで事件は御史に下され、中丞の侍御史が司隷の官を出向して宣の属官を逮捕しようとしたが、宣は門を閉ざして侍御史を内に入れさせなかった。このため宣は、天子の使者を指して門へ入れさせなかった。これで事件は御史に下され、中丞の侍御史が司隷の官を出向して宣の属官を逮捕しようとしたが、宣は門を閉ざして侍御史を内に入れさせなかった。このため宣は、天子の使者を指して門へ入れさせなかった。これで事件は御史に下され、中丞の侍御史が司隷の官を出向して宣の属官を逮捕しようとしたが、宣は門を閉ざして侍御史を内に入れさせなかった。このため宣は、天子の使者を指して門へ入れさせなかった。これで事件は御史に下され、中丞の侍御史が司隷の官を出向して宣の属官を逮捕しようとしたが、宣は門を閉ざして侍御史を内に入れさせなかった。このため宣は、天子の使者を指して門へ入れさせなかった。これで事件は御史に下され、中丞の侍御史が司隷の官を出向して宣の属官を逮捕しようとしたが、宣は門を閉ざして侍御史を内に入れさせなかった。このため宣は、天子の使者を指して門への

伝は次のようになる。

漢代の刑罰と宮刑について（二）

志社法學二八巻六号

一九八九年
注：長、朝為長守也。朝，朝為朝已也。

注：宣既被刑，乃徙之上黨，以為其地宜田牧，又少豪俊，易長雄，遂家於長子。
 hikingばれ次のことくである。

班固は漢書刑法志の末尾（訳注中国歴代刑法志、五七頁）に、「前漢末、後漢初期の刑罰の実態を叙して次のことくい

うている。

「今日髷釈一等、轉問入於大辟。」

（上略）至乎坐窪之盗、忿怒傷人、男女淫佚、貲金為賊、若此之類、髷釈之罰、又不足以懲也。

（上略）至乎坐窪之盗、忿怒傷人、男女淫佚、貲金為賊、若此之類、髷釈之罰、又不足以懲也。

と。ここに班固のあげる四種の犯罪（そのうちにも官吏の賊罪が含まれている）のごときは、髷釈の刑ぐらいでは防止でき

てあげれば次のこともある。

さらには次のようにも記している。（同上、五六頁）

「前漢の成帝・哀帯時代の減死一等の刑としてあげた四例には、敦煌への徙遙と髷釈とがそれぞれ二例ずつあり、晩

志所載の梁統の上疏中に、哀帯のとき減死一等をもって常法とするにいたったことが述べられており、また漢志の末

尾に班固が、当時、死刑に次ぐ刑が髷釈であったと記していることによつて、前漢末から後漢の明帝の頃までの大罪

制においては、死刑一等を下せばただちに髷釈であったことが知られ、従って髷釈が死刑一等を下した刑であったこ

とになるが、他方、明帯以後の歴代天子の詔においては、一貫して徙遙をもって減死一等の刑としている。これに対
漢代の刑罰と宮刑について

後漢書列伝に見える減死一等の事例には、「髡鉄徒刑方」と三刑をあわせ科するものの、また「死爵士、免死庶人」に後漢書列伝によってあけた七例のうちには、「減死一等」との刑に数種の刑の存していることが知られる。またこれらも存し、これが少からず問題となるが、もしこれを漢統の上級に見られること、減死一等の刑に数種の刑の存していることをもって常法としたとするならば、その刑が何刑であったかはしばらく推定して、それが常法するの故をもって、あえてその刑の刑を記さなかったということ、一応は成りたち得る理解であると思われる。これが上に見えてきたところの問題の要約である。

そこで私にはいま一つ、仲長統の伝に引くその「損益論」のことばを引用したい。

肉刑の廃、軽重無品、下死則得髡鉄、下死則得髡鉄。

とあって、これは後漢末の刑罰の状態を叙したものであるが、これによれば文帝の肉刑廃止（220年）以後、後漢の献帝（220年）の時代にいただけるよう四百年近く、死刑一等を下せば髡鉄であり、髡鉄一等を下せば髡鉄であったとあり、従って減死一等の刑は髡鉄であったということになる。

なおここにいう髡鉄が髡鉄剃髪であるとすれば、文帝の肉刑廃止時における髡鉄剃髪と髡鉄とは、その刑の軽重が入替えているところである。しかしぼら班固の仲長統は何かによって上記のごとく述べたかが問題となるが、それについて
事実として、髡鉾以外に種々な滅死一等の刑が存在していることを、班固のとき史家の仲長経のときが知らなかったとは考えがたいからである。また従来刑は、前漢以来、滅死一等の刑として行なわれてきたが、後漢の明帝以後の詔によって、確然と滅死一等の刑として、刑制史的にその位置を占めるにいたったというべきである。しかし（5）の蔡邕が髡鉾と徙遥をあわせ科されているに、（3）の胡昭は庶人とされたにすぎず（7）の史弼もまた左校に工人として労務に服したにすぎないといった事例は、同じ滅死一等の刑でありながら、それが必ずしも一定した刑でなかったことを示す以外の何もない。そしてこのような同等の刑名に対する科刑に於ける甚だしい軽重の差が生ずることを注目して挙げるべきである。

犯罪者の身分の高下や過去の功績、天子の懲意や愛憎、あるいはその時における政治状況や、政治的あるいは経済的な変化等を考慮に入れることにより、それぞれの刑名が適切に適用されるべきであるとされる。すなわち、滅死一等を用いるべきであるとされるのは、重罪を犯した者、または大きな危険を及ぼす可能性の高い事件を犯した者に対して適用されるべきであるが、必ずしもその適用が一義的であるとは限らない。そのため、具体的な事件や状況によっては、他の刑名が適切に適用される可能性がある。
漢代の刑罰と宮刑について（一）

同志社法学
二八巻六号
四六（九〇〇）

重要人物にのみ除線を付しておる。

哀帝の祖母の定陽太后は、尊号を称したいと欲していたが、太后の従弟の大司馬高武候傅喜と、丞相の孔光と大司空の師丹とは、共に正議を持ててこれに反対した。しかるに同じく太后の從弟の孔鄉侯傅晏は、太后に詰問してその旨に従い、新しく京兆尹となった朱博と謀って太后の願望を現実させようとした。このため反対する師丹がまず官を免ざれ、師丹に代って朱博が大司空となり、朱博はしばしば哀帝に見えて封事を奏し、丞相の孔光を罷免して庶人を怒らせてやまず、朱博をしてその爵位封邑を没取するように命じ、朱博はついに孔光に代って丞相となり、朱博のことを怨んで、朱博に敬徳されて無用の人物であるから、爵位封邑を没取して庶人とすべきであると上奏させた。哀帝は傅太后はなおも傅喜に尊いとされるので、傅喜はすでに退位されて無用の人物であるから、爵位封邑を没取して庶人とすべきであると上奏させた。傅太后は丞相の趙玄に強要して、傅喜は

朱博は宰相である、趙玄に上卿であるのに、朱博が左道を執って上恩を虜囚し、以て信を貴威に結び、君に背いて

同に傅喜の免退を謀っており、礼を失し不道である。三人とも廷尉の詰獄において罪を議すべきである。三

そこで哀帝はさらに将軍・中二千石・二千石・諸大夫・博士・議郎らにこれを議せしめたところ、右将軍の顧望ら
四十四人の意見は、篤宣らの奏するがごとく処理すべきであると奏申した。

しかし、諫大夫の議論や十四人が上奏するのは次のようであった。

春秋の義では、姫をもって君に仕えるは常典の役であると考える。しかし、

（左）はこれを大事件として記録している。晋は行父を魯国を乱す者として執り行ったので、春秋を要にして上を問う。この計謀を立てた事件の個人を道にあたる。

（右）はこれを大事件として記録している。朱博は廷尉を放棄し、その族人に懲戒し、大臣を削除した。朱博は廷尉の詔詡に譲らしめたが、朱博は自殺してその国は除かれた。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。

上減死罪三等、削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。と記しているが、朱博は、「三」を削除した。削封戸四分之一、假諫者殺丞相諫廷尉詔獄、博自殺、國除。
漢代の刑罰と宮刑について（上）

刑とは目しがたく、かりに三等とするものである。

さらにまた仲長経伝において見ごとく、
死罪一等を下せば髡鉞であり、
鞭答は死罪から二等を下した刑ということになる。然らば鞭答からさらに一等を下した三等の刑名は如何というか、
おおよそそれと、胡注が讃臣・姿をもって死罪三等を下した刑とするのとの関係如何というか、
これらの問題はいずれも後考をまつとするよりほかはない。（未完）